

【白】

青、たとえば、海や空。それは永遠に広がり、無限に続くものの象徴。

春、たとえば、桜や風。それは新たな出会いと、永遠の別れの季節。

青春という言葉は、嫌いだ。

『青』も『春』も、わたしには眩しすぎる。

高校三年生と言えば、世間一般にはまさに青春まつただ中と言われる年頃だろう。

わたしとて、学校では友達とおしゃべりをするし、買い物にも行く。傍から見れば、青春を謳歌している女子高生に見えるだろう。

去年、わたしのクラスに転向してきた留美とは、特に仲がよい。

どちらかと言えば控えめなわたしを、賑やかな彼女はぐいぐいと引つ張ってくれる。

だが……彼女は忘れてしまっている。

なぜ、わたしと彼女が親しくなったのか。そのきっかけを作ったのが誰だったのかを。

留美だけではない。クラスメイトも担任も、育ての親の由起子さんも、誰一人として彼のことを記憶していない。

まるで、初めからそんな人はいなかったかのように。

折原浩平 —— 大切な、わたしの恋人。

およそ一年前、彼はわたしの前から姿を消した。

唐突に、前触れもなく……とは、言わない。

その少し前、わたしと彼は結ばれた。仔細については、ここでは語るのには恥ずかしいので避けておこう。

時を同じくして、遠くを見ていることが多くなったように思う。

此処ではない、何処か。

現在ではない、何時か。

彼の瞳の奥に映っているのが、この世の何処にも無い場所のようで、わたしは幸せなはずなのに、なぜか怖かった。

わたしはことあるたびに、彼の手を握り、繋ぎとめようとした。

そんなわたしの手を、彼も握りしめてくれた。

だが —— 結局、絆にはなれなかったのだ。

ただの失踪ではない。

彼は、この『世界』から消えてしまった。皆の記憶から消えてしまった。

唯一、わたし——長森瑞佳を除いて、誰も折原浩平を知らない。

いま、わたしは部屋の整理をしている。

もうすぐ、高校生活が終わろうとしている。卒業を間近に控え、周りは慌ただしい。

わたしは地元の大学の音楽科に進学が決まっている。留美は、引越し前に住んでいた土地の大学に進む。

連絡を取り合う約束はしているが、やがて時間が過ぎれば疎遠になつていくかも知れない。

それは、漠然とした、だが確かな予感だ。

四月以降もこの家に住むのだから、特に片付けをする必要もないのだが、何かをしていなければ落ち着かない。

部屋の整理とは、つまり心の整理だ。

もうじきに三月になる。

まだ、寒い日が続く。こうして部屋の中にも、じつとしていると手がかじかんできてくるようだ。

暖かな春の陽を感じるようになれるまでは、今しばらくの間間がかかるだろう。

「……季節の移ろい、か」

暖を取るように両手をこすり合わせながら、思わずわたしは呟く。

作業は、ほぼ終わりに近づいている。

高校の三年間で使い、そしてこれからは使うことはないであろうもの、例えば制服や教科書と言ったものも、まだ捨ててしまふには忍びない。

思い出と呼んでしまふには、あまりに早すぎる。

押入れにしまい込まれた、子供の頃に遊んだおもちゃの類は、これまでに何度か整理してきたから、もう不要な物は無い。

結局、なんとか場所を詰めて、仕舞いこむより他にはない。

そのスペースを確保するのが、今日の仕事だった。

それは、ふと目に止まった。

それは、押入れの片隅に、忘れられたように潜んでいた。

どうして、これまでの数度の片付けで捨てられなかったのか、まるで今日、この時にわたしに見つけられるために取つて置かれたかのように、そこに待っていた。

空っぽの、鳥籠。

金属製のそれは、サビが浮き始め、過ぎた年月を感じさせ